

年間第十六主日

2018.7.22

マルコ 6・30-34

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高神父

今日の福音には、イエスとその弟子たちが進み行く道における、一つの到達点とそれを越えて広がる新たな道程が語られています。イエスが二人ずつ組にして送り出された12人の弟子たちは戻って来て、イエスのもとに集り、「自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した」と語られています。

イエスに遣わされた旅先で自分たちが遭遇し経験した具体的な一つひとつの事柄を逐一報告し合っているうちに、分かっていたつもり自分たちの活動の意味を弟子たちは本当に悟ったにちがいありません。弟子たちは自分たちの経験したことを通して、イエスが神から受け、自分たちにも託そうとしておられる、イエスがそれに身を捧げておられる、イエスの使命を垣間見ることが出来た思いになったことでしょう。そのことが、「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と言ってくれるイエスの気遣いよりも、出入りする人が多くて食事をする暇もない弟子たちを力づけたにちがいありません。だから、イエスとともに乗り込んだ船の上での一時の休息の後に、先回りして自分たちの行く手に待ち受けている大勢の人々の姿を目にしたとき、弟子たちは少しもうんざりした思いに囚われてはいなかったのではないかと思います。

弟子たちが自分たちの休息を後回しにしてでも立ち上がって行くことが出来たのは、イエスがともにいてくださり、イエスの思いが弟子たちにも共有することが出来るものとなっていたからです。弟子たちは、イエスによって遣わされた行き先で自分たちが経験したことを通して、そしてそれをイエスのもとに戻って報告し合うことによって、イエスの想いと一つになったイエスの弟子たちとして成長して行ったのです。

今日の福音の末尾には「イエスは船から上がり、大勢の群集を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた」と語られています。弟子たちは、自分たちの中にいてくださるそのようなイエスに目を向けることによって、押し寄せてくる大勢の人々の群れにもたじろぐことなく、一時の憩いを与えてくれた舟から立ち上がってゆくことが出来たのです。今日もこのミサにわたしたちを呼び集めてくださったイエスは、今この国に、そしてこの世界に生きる全ての人々の上に、今日の福音が語っていると通りの深い

憐れみの眼差しを注いでおられるのです。

日々目にし耳にする内外のニュースに接して暗澹たる想いに陥らざるを得ないわたしたちの心に、今日の第一朗読で聴いた、当時の国の指導者たちを告発する預言者のことばは、どのように響いてくるでしょうか。

「災いだ。わたしの牧場の群れを滅ぼし散らす牧者たちは。あなたたちは、わたしの羊の群れを散らし、追い払うばかりで、顧みることをしなかった。わたしはあなたたちの悪い行いを罰する」。この裁きのことばに続いて、次のように告げられています。「このわたしが、群れの残った羊を、追いやったあらゆる国から集め、もとの牧場に帰らせる。群れは子を産み、数を増やす。彼らを牧する牧者をわたしは立てる。群れはもはや恐れることも、おびえることもなく、また迷い出ることもない」と主は言われる。これに続く残りの節で語られていることは、旧約の人々が預言者のこのような告知のことばを頼りに待ち望むことになった、いわゆるメシア預言の一つに数えられています。旧約の預言者が告げた「主はわれらの救い」というメシアの名は、イエスこそがメシア・救い主と信じる新約のわたしたちの信仰にとって決して偶然のことではありません。わたしたちが信仰によって口にするイエスという名は、まさに「主は救い」という意味だからです。

今日の第一朗読で聴いた、牧者たちとその羊の群れに対する預言者のことばは、何となく今のわたしたちの時代の状況と重なるように思えないでしょうか。群れを追い払うばかりで、顧みようとしない牧者たちに見捨てられようとしている羊たちは自分たちの足で立って、互いに寄り添ってあても定かでない道を進み行かなければなりません。そのような今の時代の状況の中に生きるわたしたちの上にも、今日の第一朗読で聴いた神の約束のことばが響いており、今日の福音で聴いた、イエスの憐れみに満ちた眼差しが注がれていることを信じたいと思います。

イエスのもとに集り、自分たちの経験を分かち合った弟子たちが、イエスの想いに結ばれて、再び、牧者のいない羊の群れのような人々の現実の中に、イエスに従って歩み出して行ったように、今のわたしたちの教会が、そして今の教会のわたしたち一人ひとりが、真の牧者であるイエスに従う弟子たちとなって歩み続けることが出来るように祈り合いたいと思います。